

一人の命も一匹の命も同じ大切な命

浜中町 NPO法人ドッグレスキューしおんの会

ペットは家族の一員と言うのは今や常識といえるほど。ペットを飼う家庭はますます増え続けているが、ペットの増加に伴い、「ペットが病気になってしまった」、「しつけができない」、「世話が大変になった」といった理由などで捨てられたり、保健所に持ち込まれるケースも少なくない。改正動物愛護管理法が2013年の9月1日に施行され、相当の理由がない限り、地方自治体は所有者から犬や猫の引き取りを拒否することも明記された。飼い主とペット双方の高齢化なども起きており、人とペットをとりまく環境を改めて見直す時期にきている。

「NPO法人ドッグレスキューしおんの会」は、一匹でも多くの犬の命を救いたいという志のもと、2006年8月に設立された。釧路管内の浜中町で捨て犬や迷い犬、野犬が生んだ犬が野生化しないように保護し、飼い主を探す活動を行っている。

代表の福澤智子さんが愛犬、アインシュタインと初めて散歩に行った犬たちが活動を始める原点となった。

2002年（平成14年）2月6日、しばれる夕暮れどき。赤ちゃん犬7匹が米袋に入って、捨てられているのを雪の中からアインシュタインが見つけた。凍死寸前の状態

だったが、家に連れて帰って暖めたところ7匹全てが息を吹き返し、そのうちの1匹を星子と名づけて飼うようになった。その星子が隣で安心して寝ている姿を見ているうちに、「私の知らないところで沢山の犬たちが捨てられたり死んだりしている。可哀想に死んでゆく犬たちをなんとかしたい」と思ったそうだ。しかしどうしたらいいか、その時はまだわからなかったという。



保護犬も募金活動に一役買っている

2006年の春。月に一度だけ仕事に行く別海町で仕事を終えて外に出たところ、真っ黒い子犬が3匹オリに収容されて保健所につれていかれる寸前に出くわした。福澤さんはその子犬を引き取り飼い主を探した。

星子を拾った時からずっと保護活動すべきか迷っていたが、その3匹の犬たちと出会った時に「迷っている間にも次々と命を失っている犬たちがいると思ったら、

迷っていただけないと思いました」。

その年の8月7日に同じ志を持つ数人で会を立ち上げた。次の年の2007年2月に元農家に住み着いていた野犬の雌犬5匹に次々と子犬が生まれ、25匹もの子犬がいると聞き、メンバーらで試行錯誤しながらもその犬たちを保護し、飼い主探しに奔走した。当初は、啓蒙活動のみを行うことにしていたが、このことがきっかけで保護活動と飼い主探しも開始した。

2010年12月にはNPO法人として認証された。

■ 好評の犬のお散歩体験

会は、獣医、介護士、酪農家ら理事を含めた中心メンバーが運営会員になっている。飼い主になったのが縁でメンバーになった人もおり、この運営会員で毎月例会を行う。また、「一時預かりボランティア」といって保護犬に飼い主が見つかるまで、自宅で犬の世話をするボランティアもいる。

子供たちもメンバーとなっている一般会員は、飼い主を探すための犬の譲渡会や保護犬の世話などの手伝いをする。賛助会員は、年会費1000円(中学生以下500円)を払い、犬の食事代や避妊・去勢手術など金銭面で援助。法人会員は、活動に賛同した企業が会費1口1万円で支援する。会員はあわせて現在80人ほど。会員には「RAINBOW LIFE」という会報を発送している。

保護する数は年間25～30匹ほど。保護した犬たちは隣町のホームセンターの店舗

入口で行う犬の譲渡会やホームページ、イベントで飼い主や会員を募る。飼い主が決まるまでの間は、一時預かりボランティアやメンバーが犬たちの世話をする。世話に必要なフードやペットシートなどは会から提供される。



わんわん思いやり教室では、子供たちもスタッフとして活躍

引き渡しの条件として、飼う環境が整っていて最後まで責任を持って飼育すること、飼い主には避妊・去勢手術を条件に引き取ってもらう。また、産まれて間もない子犬は1匹だけにせず、ほかの犬たちと一緒に過ごさせて生後2ヶ月を過ぎてから引き渡すようにしている。

前述した改正動物愛護管理法でも生後56日(当面3年間は45日)未満の販売を禁止しているが、生後早い段階で親や兄弟から引き離すと人のかんだり、ほえるなどの問題行動が起きやすく、犬の社会性を養うための大切な時期だとして重視しているからだろう。

イベントは浜中町近隣の町でのお祭りなどに参加して行っている。10月6日に北海道立厚岸少年の家・ネイパル厚岸で開催

された「動物ふれあい祭」では、日差しがまぶしく感じるほどの青空の下、「わんわん思いやり教室」や子犬の譲渡会などを行った。

わんわん思いやり教室では、福澤さんをはじめ、会のメンバーらが犬と仲良くなる方法を、元は保護犬でメンバーの愛犬となった犬たちと共にわかりやすく説明した。毎回、予約がすぐにうまるほどの大人気の犬の散歩体験では、親子連れなどが、犬を連れて敷地内での散歩を楽しんだ。

お散歩体験を終えた釧路市の親子は「楽しかった。毎回、イベントには参加しているが、市営住宅なので、犬が飼えないのが残念」と話していた。フリーマーケットでは、メンバーの子供たちが売り子となって、手作りのティッシュケース、コースターなどの雑貨や古着を販売した。



震災の記憶を風化させないために被災ペットの写真展も行う

■ 被災ペットのための募金活動

2013年9月22日の浜中町牧場祭のフリーマーケットでは、1万1400円を売り上げた。被災地支援のために、募金活動や被災した動物の写真展も行った。募金箱を首から下げた犬たちの協力によって募金1万6459円が集まった。この募金は、被災ペットの支援や救護活動をしている仙台市のドッグウッド(被災犬保護施設)に寄付している。

「縁あって岩手県に、以前保護した犬のタミコがいます。大震災の日に津波で家が流されてしまいましたが、飼い主さんがタミコを抱いて命からがら逃げてくれました。これからも被災したワンちゃんたちのために募金活動を続けていきたい」と福澤さん。

犬のえさ代や治療費など、会の活動資金はこうしたイベントでの収益金や募金、会費があてられている。活動については、影で支援している人もいる。

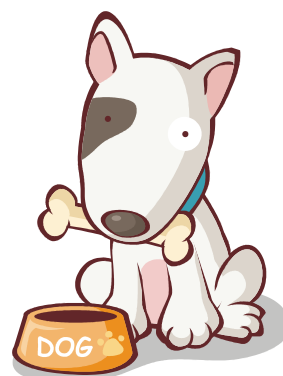
「あしながおじさん」と呼ばれているその人物は、町内の農家の男性らしく、名前を明かさず、浜中町の農協を通じて毎月のドッグフードの寄付やイベントがあるたびに犬用のおやつを届けている。手紙のやり取りだけはしており、イベントを見て何か協力したいと寄付するようになったそう。おやつは、イベントに来た犬たちにも無料でプレゼントされている。

今後について福澤さんは「活動の拠点がほしいですね。飼い主たちが集まったり、ドッグランがあったり犬の道の駅のようなものが作りたいですね」という。「浜中町は自然豊かで住みやすい所なので、犬連れの旅行者がきて宿泊ができる場所にするのもいいかもしれない」と夢は広がる。



フリーマーケットでは、メンバーが持ち寄った手作りのグッズが販売された

最後に「犬は福澤さんにとってどんな存在か？」という質問をすると、「飼い犬のリオンは野犬の子ですが、子犬の時に人に乱暴されたせいで、今でも唸ったりすることがあります。『大丈夫だよ』と話しかけるようにしたら私の傍に来て甘えるようになりました。今ではそのリオンが保護犬のまとめ役になっていて、本当に助かっています。かわいそうな犬たちの命を救うために始めた活動ですが、犬の愛情や優しさに私の方が救われているような気がします」と答える福澤さん。犬たちを見つめながら「犬は本来優しい動物。人も犬のように優しい気持ちを持てば、社会はもっと幸せに満ちていくと思うんですよね」。



■ 連絡先

〒088-1366

厚岸郡浜中町茶内旭 1 丁目 20 番地
NPO 法人ドッグレスキューしおんの会
代表 福澤 智子

TEL：090-9516-4746

FAX：0153-65-2604

Email：zion_hamanaka@yahoo.co.jp

zion_hamanaka@docomo.ne.jp

URL: <http://dogrescuezion.ninja-web.net/>